

## 現代インドにおける都市文化と中間層 ーインド西部マハーラーシュトラ州におけるタマーシャー劇の変容を中心としてー

平成 19 年度入学

参加したフィールドスクール：ネパールフィールドスクール

調査地：インド共和国

飯田 玲子

キーワード：現代インド・都市・中間層・芸能・タマーシャー劇

### 自分の研究テーマについて（600 字）

本研究は、現代西インドにおける都市文化の動態を、新興中間層の自己構築との関連で理解することを目的とする。その際特に、現在新たに緊密化されつつあるグローバルな「農村ー都市ー海外ネットワーク」という社会的文脈に注目したい。事例としては、現在西インドを代表する芸能となりつつあるタマーシャー劇を取り上げる。

1991 年のインド経済自由化以降、インドでは新たな中間層が勃興しつつある。彼らは、親族・カーストや知人・友人などの関係性を基盤に、農村、都市、海外をつなぐかたちで活発な社会経済活動を展開している。インドの経済的首都といわれるムンバイを擁するマハーラーシュトラ州では、こうした新興中間層を中心にタマーシャー劇の人气が大きく高まりつつある。

従来タマーシャー劇は農村を中心に上演されてきた。都市に居住するエリート層からはしばしば、小作の農民男性や出稼ぎ男性労働者が余暇に楽しむ「田舎くさい野卑な芸能」として評価されてきた。しかし、現在ではタマーシャーの上演は、都市の常設劇場や公共劇場にシフトしつつある。演目も従来は風刺劇やエロティックなコメディが中心であったが、現在では、前日に行われたクリケットの試合や政治に関する話題などの、マスメディアなどで市民が共有する公共的な話題が多くなされている。またタマーシャーに関わる話題は、新聞や雑誌、インターネットなどのメディア媒体にも多く取り上げられ、人々の注目を集めている。タマーシャー公演には中間層を中心とする多くの観客が詰めかけるだけでなく、DVD や写真集なども多数販売されており、中間層子女の習い事となるばかりか、その成果をインターネット動画サイトで配信する若い女性も現れ始めた。西インドの代表的な都市祭礼であるガネーシャ祭では、若者たちが多数集うメインイベントの一つとなっている。ハリウッドで制作されるフィルムや Video-CD、カセットなどのエンターテインメント産業にもタマーシャーは登場するようになってきている。



【写真 1: プネー市内の旧市街も、建設ラッシュ】



【写真 2: タマーシャー劇やラヴァニを題材にしている市販の Video-CD】

携帯電話の着信音サービスにもラヴァニの音楽が登場し始めている。さらに、タマーシャーは、マハーラシュトラ移民の招聘により、現在アメリカやイギリスなどでも上演されるに至っている。

現在、こうしたタマーシャーの変容を担っているのは、近年になって農村から移住し、農村との繋がりを持ちつつ都市で活躍の場を見いだそうとしている新興中間層の人々である。さらに、西インドにおける社会・経済はグローバルな展開を遂げており、海外への出稼ぎや移住などを通して海外との結びつきを強めている。それに呼応するようにタマーシャーに代表される新たな都市文化は農村を元々の基盤としながら、都市で成長し海外でも展開している。タマーシャー劇の人気背景には、元々農村を中心として上演されてきたこの芸能がより都市的に洗練されたものへと変容することにより、農村に基盤をもちつつも都市や海外で活躍する中間層にとっての文化的アイデンティティの拠り所になっていることが考えられる。新興中間層にとってタマーシャーは、変容する社会において自己を構築する文化的な媒体としての役割を担っているといえよう。村落を基盤としてグローバルな都市文化へと発展を遂げたタマーシャーは、中間層にとって自己を投影するのいうってつけの媒体である。中間層の人々はタマーシャーに自己を投影しながら、公共的な議論を通じてタマーシャーを再形成することを通じて、自己自身のイメージをも再構築していると仮説的に考えられる。

### フィールドスクールから得られた知見について（600字）

今回、ネパールフィールドスクールに参加した中で、多くのことを経験した。一つは、チトワン国立公園の設立によってもたらされたものである。政府の見解としては、チトワン国立公園の設立によって観光収入が見込めるといふこと、また生態系の保護が可能になるといふことが挙げられている。しかし、実際にはこれまでその土地に居住してきた人々は、その住処を追われることになった。私たちは、住処を追われた人々が暮らすピンタリ村で話を聞くことができた。ピンタリ村に住む人々にとっては、これ



【写真 3: ピンタリ村の人々】



【写真 4: ピンタリ村の女性達】



【写真 5: マンガルタール村の風景】



【写真 6: 識字教育にも関心が高い、村の女性達】

まで狩猟や採集などをおこなってきた土地が、ある日突然国立公園として策定され立ち入り禁止になってしまったのである。彼らは、生活資源を採集するために現在でも監視の目を盗んで公園内に入るといった生活を続けている。しかし、立ち入ったことが発覚した場合、国立公園を警備している軍人によって暴行を受けたり、嫌がらせを受けている。自然保護の名の下に策定された国立公園ではあるが、その陰でこれまで居住していた人々から全てを取り上げるというやり方には疑問が残る。

もうひとつは、マンガルトール村で識字教育をうける女性達の集会に参加させて頂いたことである。夜の集会に参加させて頂いた私たちは、「なぜ勉強するのか？」という質問をした。それに対して、「自分が心の中で思っていることと、口から出てくる言葉が違う。」と答えが返ってきた。自分の思っていることを、相手に伝えることが困難で、相手に上手く伝えることができないというもどかしさ。そうした状況を克服すべく、女性達は家の仕事を終えた後である夜に集まって勉強をする。この識字教育を受ける女性達の熱っぽい語りを聞くにつれ、私たちが最初に投げかけた「なぜ勉強するのか？」という質問自体が、非常におこがましいことであることに気づかされ、恥ずかしくなった。

### **フィールドスクールで学んだことが、どのように研究テーマに生かせるか（400字）**

ピンタリ村で話を聞いていた際に言われたことがある。「わざわざ遠くからここに来て、いったい何をしにきたの？」誰も答えることが出来なかった。私たちにそう尋ねた女性は、更に「この村の現状を聞かせてくれと多くの学生や研究者が訪れるけれども、私たちに何をしてくれるというの？これまでに色々な人のインタビューを受けたけれども、私たちの生活は何も変わってはいない。」と言った。

私たちはその晩、学生同士でこの問題を考えた。「調査」という名目の下に、私たちがしていることや、無反省におこなっているフィールドワーク、集めてきたデータを論文にしてアウトプットして自分の業績を作って、結局その土地の人々から知的搾取をしているのではないかという思いにも囚われた。夜通しで議論したが、結論は出なかった。そして、いまだに結論は出ていない。これから自分の研究対象とどのように向き合っていくのかということ深く考えさせられたことが、今回のフィールドスクールでの最大の学びである。